

# 戦中・戦後の専修大学を語る

## 専修大学の新たな出発 ―旧制大学から新制大学へ―

### 座談会の趣旨について

この座談会は、専修大学創立一三〇年を記念して二〇〇九年九月に刊行した『専修大学の歴史』の執筆・編集のために、戦中から戦後の時期、専修大学に在籍していた卒業生の方々にお集まりいただき、当時の様子を語っていただいた際の記録である。

専修大学は、これまで創立一〇〇年以降五年ごとに記念誌を作ってきたが、一三〇年史については、これまでのようなビジュアル中心のものではなく、誰もが読める、また学生への授業で使用できるようなものにしたという意見が編集委員会から出された。

二〇〇八年度九月から本学では、大谷正（法学部教授）を中心に、専修大学の歴史をテーマにした授業を開講したこともあり、授業のテキストとしても使用できる本を作ろうということになったためである。また学生だけに読んでもらうのではなく、多くの校友をはじめ、全国に向けて専修大学の歴史を発信したいという思いから、書店でも購入できるよう平凡社から刊行することとなった。

そこでどのような内容にするかということ編集委員会で議論したところ、これまでのような創立者や大学の経営に携わっている教

員や優れた研究者の話だけでなく、学生や卒業生の動向も盛り込んだものにしようという基本的な方針が定められた。

しかし肝心の学生の在学中の様子や卒業後の動向を把握できるような資料が非常に少なく、具体的にどのような学生生活を送り、卒業後、どのような活躍をしてきたのかということがわからない。そこで、卒業生の方々に集まっていたいただき、学生時代や卒業後の話をお聞きして、それを『専修大学の歴史』の執筆に反映させたいという趣旨から今回の座談会が企画された。

また、専修大学では創立一五〇年に向けて、史料集の刊行を予定している。大学の歴史に関わる史料を埋蔵させておくのではなく、重要なものはできるだけ公開することによって、大学に関心をもつ多くの方々に活用していただきたいという趣旨からである。

しかしこのような史料集の編纂のためには、各方面から詳細な調査を行い、卒業生の方々からいろいろな情報を提供していただく必要がある。今後も座談会を定期的に開催することによって、多くの卒業生の方々から様々な意見をお聞きできればと考えている。

「専修大学の歴史」編集委員 大谷正（法学部教授）

日時 平成二二年三月二日(土)午後一時三〇分〜四時三〇分  
場所 神田校舎八号館(法科大学院棟)五階 五A会議室

出席者 樋口義雄氏 (昭和一八年予科 昭和二二年経済学部卒)

繁住敏郎氏 (昭和二年予科 昭和二五年経済学部卒)

齊藤昇氏 (昭和二年予科 昭和二五年経済学部卒)

秩父勇一氏 (昭和二七年商経学部商業学科卒)

長谷川富士雄氏 (昭和二七年商経学部経済学科卒)

古家保二氏 (昭和二七年商経学部経済学科卒)

司 会 大谷正 (専修大学法学部教授)

青木美智男 (専修大学史編集主幹)

新井勝紘 (専修大学文学部教授)

岩崎 それではお時間になりましたので、そろそろ始めさせていた  
だきたいと思えます。

本日は本当にお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます  
ございます。大学史資料課長を務めております岩崎と申します。どう  
ぞよろしく願います。

専修大学は来年度、創立二三〇年を迎えます。大学史資料課では、

本学文学部の教授でありました青木美智男先生を編集主幹として迎  
え、名称はまだ未定ではございますが昨年より、専修大学一三〇年  
史の刊行準備を進めているところで。

本日は、六人の校友の方々にお集まりいただきまして、学生時代  
のお話をお伺いするとともに、この話を一三〇年史編集の資料とし  
ただけではなく専修大学の歴史を後世に伝えるための大切な資料と  
して有効に使わせていただきたいと思います。

これまで大学史資料課の業務は資料の収集や保存が中心で、活用  
にまで手が回らないというような状況でございましたが、昨年、青  
木先生がお越しになって、大学の方からも色々知の発信をしてい  
こうということになり、『専修大学史紀要』という研究雑誌を今年  
から刊行することになりました。来年三月に第二号を刊行する予定  
になっておりますけれども、本日の座談会の模様を掲載させていた  
だきたく、ご了承をいただきたいと思いますのでよろしく願いい  
たします。

それでは私の方から、本日出席の一三〇年史の編集に携わる教員  
の紹介をさせていただきますと思います。今、申しました元文学部  
教授で、現在、専修大学史編集主幹をされております青木先生です。

次に、専修大学一三〇年史の編集アドバイザー部会という組織が  
ございまして、そのメンバーである新井勝紘文学部教授と大谷正法  
学部教授です。

それではここからは、司会および進行を務める大谷先生の方から

よろしくお願いしたいと思います。

大谷 それでは、これからあとの司会・進行は法学部の大谷がさせていただきます。お手元に二枚の年表のようなものをご用意いたしました。大体、昭和一五年頃から終戦後の昭和三〇年ぐらいまでのものです。

今度刊行する『専修大学の歴史』の執筆は、戦争中はこちらの新井が担当、その後の戦後の部分、昭和三〇年までは、私が担当となっています。先日から大学史資料課で資料を見ておりましたが、実際の学生の動向等を示す資料が少ないため、今日は皆さんに色々なお話を聞かせていただき、この時期の専修大学の資料を後世に残すとともに、我々の執筆にもぜひとも参考にさせていただきたいと考えております。

本日は戦争中の専修大学の様子、当時の大学の幹部の動向、あるいは戦中・戦後における教育制度の変遷、そのほか勤労動員や繰り上げ卒業、徴兵猶予の停止というようなところをぜひともお聞きしたいと思います。

今日お集まりいただきました方々では、樋口先生が戦争中に在学しておられました。生徒出陣を経験し、戦後、大学に帰ってきておられますので、最初に樋口先生から戦争中、あるいは戦後のお話を伺いたいと思います。

それから、年表の一枚目の下の方は終戦直後の専修大学の動向を

まとめたものです。終戦とともに大学は、戦争から帰ってきた学生、新しく戦後入ってきた学生に対して授業を始めるんですけども、実際は昭和二〇年には再開できず、翌年から授業が始まったようです。そのときに一つ大きなテーマとして、新しい大学を作ろうという動き、『専修大学百年史』（以後、『百年史』と略）には「大学復興運動」と書いてあります。いろんな学生たちの動きがあったようですが、この辺も『百年史』を読んだだけでは、あるいは大学史資料課が保管している資料だけでは、つかみづらいところがありますので、その時期を体験された先生方に、ぜひともお話を聞きできればと考えております。

つづいて、年表の二枚目にある新制大学への移行の問題をお聞きたい。昭和二四年が新制大学の第一期になっていますが、今日いらっしゃる方々では、樋口先生、斉藤先生、繁住先生を除く他の三人の方は多分、新制の卒業になるかと思えます。

旧制から新制への切り替え時期の様子や編入のあり方について、我々にはよくわからない点が多いので、教えていただければと思います。

それから、新しく生田校舎を買って大学の発展の基礎ができるのもこの頃です。当時の大学運営の中心になっておられましたのは、今村力三郎総長をはじめ、大河内一男学長、それから築田欽次郎理事長です。その後を継いで小林良正学長、鈴木義男理事長・学長、川島正次郎理事長・総長らが、専修大学の運営を担って発展させて

いきました。これらについてもお話を願いたいと思います。

それから、何よりも我々が聞きたいのは、当時の学生生活です。勉学の様子や、それから本日出席された方ではスポーツ方面で活躍された方がおられますので、そういう学生生活の様々な側面について、ぜひとも知りたいというのが我々の希望でございます。

今日は六人の方がいらっしゃって下さいましたので、御一人一〇分程度で、それぞれの学生生活、あるいは今日お配りした年表のなかで我々が聞きたいと思っていることについて自由にお話いただき、その後、少し休憩を取りまして、こちらからの質問に答えていただければ大変ありがたいと思います。

それでは順番としては、先輩の方から順次お話を願いたい。最初に樋口先生から口火を切っていただき、次に繁住先生、斉藤先生の順でお願いいたします。

そして昭和二七年卒業の方々については、五十音順で秩父先生、長谷川先生、古家先生と、こういう順番でお願いしたいと思います。がよろしいでしょうか。

それでは、樋口先生からよろしくお願いいたします。

樋口 一番古いといわれた樋口でございます。ちょっと経歴が変わっておりますので申し上げておきます。私は栃木の曹洞宗のお寺に生まれました、佐野中学を出た後、豊川妙音寺専門僧堂という学校に入りました。妙音寺というと豊川稲荷ですね。その豊川稲荷の専門

学校に入りました。

住職の資格をもらうためにはまず専門学校卒業でなきゃいけない。それで専門僧堂に入りまして二年。その後専修大学の予科に入ったわけです。その間、すでに総持寺の研究所に籍をおきまして、専修大学の学部へ入った頃に総持寺を卒業して曹洞宗の教師になりました。良い坊主になろうと思っただけです。しかし私には仏教の五欲を守れない。不殺生とかいろんなことをいうでしょ。どう考えても守れないしね。

自由人だったんですね。生まれたときから寺を継げといわれ、非常にきつい目に遭いました。何も自由なことはない。でも資格を取るために豊川妙音寺の専門僧堂へ入って、すぐに総持寺に行っただけで終わったと思っただら今度は、「駒沢大学に行け」っていうんですね。「駒沢大学に行っただって何になるんだ」っていったの。「専門僧堂に行ったんだから駒沢に行っただって何にもならないだろう」といったら、「いや、行け」っていう。でも行かなかった。それで専修大学の予科に入りました。

ここならいろんな実務の教育も受けられるし、いろんな資格ももらえるし、学校の先生にもなれるしというので専修大学を選んだわけです。そのうちに学徒出陣、特攻隊として陸軍の飛行戦隊に入りました。終戦になって専修大学に復学したんです。祖父が住職を務めていたお寺に住み、葬式の手伝いをやりながら通いました。その当時の下級生に秩父さんがいました。

私が専修大学に入ったのは昭和一六年四月でした。阪谷芳郎男爵が専修大学の総長の時です。どこに行っても立て看板には「男爵阪谷芳郎 専修大学」と書かれていました。栃木のほうまでありました。

看板には九月入学と書いてあり、私は良い学校だと思って入学を申し込んだら、入学はいつでもできるんですね。これにはまいった。そこで格好悪いから「九月入学なんて文字は外してくれ。僕は専修大学を選んだのに、そんなの困る」と、大学に申し入れたんです。

その頃は予科と専門部と学部がありました。

しかし、専修大学の学部には学生がほとんどいないんですね。学部に一〇〜一五人。予科と学部は人が少ないんですよ。専門部には学部と同じ恰好をした学生が雲霞のごとくいました。専門部というのは大学の財源だったんでしょね、ここには誰でも入れました。予科は旧制高校と同じだったから当然学問の内容が違っんですよ。そのため専門部に入ったらみんな早く卒業してサラリーマンになりましたが、予科と学部の学生は鍛えられました。

その頃は阪谷さんが亡くなって、道家さんという政治家が学長になっていました。彼はこの大学を私物化して、当時流行っていた「南進論」を唱えて政治運動ばかりしていました。弁論部を牛耳って右翼と一緒に講演会をやっていたのもこの人です。

僕は予科で文科系ですから、そういう政治方面にはあんまり関わらずに割と冷たい目で見ていたんですけども、都内でも地方でも

演説会をやってましたね。だから専修大学っていうのは右翼の学校じゃないかなっていわれていました。

学生服も国民服に替わりました。専修大学の学生も全員、国民服になった。それで受験生に嫌われるようになりました。その当時は軍の指導が強かったんですが、専修大学が一番いうことを聞いたんじゃないですか。あの頃早稲田行っちゃって、駒沢行っちゃってみんな着物ですよ。明治大学に行ったらみんな袴で下駄履いてるんですね。でも専修大学は非常にまじめな大学で、きちんと国民服着てゲートル巻いてね。本当にもう軍国主義っていうんですか、そういう学校だったですね。

ほかの大学と違って自由というのがなかったですね。報国隊とかに締め付けられてね。上級生が下級生の服装をちゃんと見てて、帽子に油塗るとぶっ飛ばされる。そういう風に非常に統制がとれていたというんでしょうか。だから明治とか日大とか早稲田とかと全然違うんですね。

それで終戦になりまして、内地に帰ってきて大学に復帰しました。神保町のこの辺りは専修大学の一角だけが焼け残っていたんです。あれは二〇年の九月ですか。僕は飛行服を着て大学に通ってたんですよ。そしたら「軍隊に入っていた奴は来い、今の大学はたるんです」と、学生監がこういうんですね。「僕は昨日まで戦地にいたんです、そんなことをいわれる必要ないでしょう」といったらね、「いや、今の学部はたるんです」とこういうんですよ。まあ、自由

の風が吹いてくると複雑になる男もいたんでしょうね。

そのうち続々と復員した学生が帰ってきました。帰ってきたら、僕がいた当時、学長だった小泉嘉章さんが、いつの間にか総長になっているんだね。自分で辞令を発行して総長になっちゃった。そして居残りの学生、復員した学生が怒り狂いましてね。色々と探りましたら、その当時大学のなかで自転車部隊、いわゆる銀輪部隊<sup>1</sup>をもってるのは専修大学だけだったんですが、そういう特殊な部隊をもってましてね。その自転車が置いてあったところから、いつの間にか自転車がなくなっているんです。

他にもピアノが小泉学長の家に使われたという話を聞いて、大学を私物化してるんじゃないかと学生たちが怒りまして、それで学生大会を開こうとってピラを貼ったら、これを大学が剥がすんです。でも復員した連中というのはみんな陸軍少尉、中尉ですから、ふざけんじゃねえっていうんで大学にねじ込みまして、そこで学生大会をやったんです。そういう軍国主義時代の教育をした人が総長なんておかしんじゃないかと。それで小泉氏の排斥運動が始まったわけです。

学生で部隊を作って、みんな軍人だったから総長の家まで入り込みました。そしたらいろんな問題が生まれて、それで小泉さんは退陣を決意した。

次に、うちの総長には誰が良いかということでもた学生大会を開きました。そのとき変な教授がいてね、おれが学長になるとか、鈴

木なんとかという何かすごいのがいたんですよ。おれを学長にしろという。私は「あの人は芸者買いをやったり酒を飲んだりしているのであんまり社会の評判が良くない人だから、ああいう人が学長になるのはだめだ」といった。それで我々がいろいろ検討していたら、その当時、朝日新聞にいた先輩が来ましてね、我々もっと専修大学を有意義な大学にしなきゃいけないということで、それで色々アドバイザーをもらって、今村力三郎先生の総長就任となりました。

経緯を少し話すと、学生委員が直接、今村先生のところへお伺いしたわけです。そして事情を今村先生にお話したら、今村先生も「それで良いんじゃないか」ということでお出まし願った。先生は老齢で引退されて、あるとき伊豆の修善寺にいました。そこに学生代表が行きまして、色々と話したら、東京大学の大河内一男さんが助教授で非常に若いんだけど、あの人が良いだろうと先生から話がありましたね、それで僕らの学生代表と、それから大河内先生と一緒に修善寺に行ったわけですね。そのときの代表は加藤君です。そのとき、今村先生と大河内先生が加藤君と一緒に風呂へ入ったと聞いてます。

今村先生がいうには、「大河内君、君は専修大学で頑張ってくれ」と。「君は助教授でまだ若いけども、私は非常にあなたを信頼してるから、任せるからやってくれ」といったときに、大河内先生が、風呂のなかでぼろぼろと涙を流したと、加藤君は帰ってきた後、みんなに報告をしました。僕は幹部をやっていたものですから、この

話を聞いてね。ああ、そういう熱心な人なんだ、大河内先生は良いなあって思ってたね、それで僕は専修大学にいた右翼的な先生のところへ行きましてね、「先生はこの大学で講義する価値はありますか、やめて欲しい」っていった。

そうすると、その教授が「樋口さん、どうしてもここにいたいから、廊下でも良いから置いてくれ」と、それまで軍服着てたのが、白い背広に着替えて来るんだね。あの右翼の先生は今でも生きてる。「どうしても専修大学にいたいから」っていったけど、私は断固はねた、だめだって。僕らはあの先生に連れられて宮城前に行って毎日、松林で勤労奉仕をやった。あそこに行くと思ひ出しますよ。宮城の横に来ると「専修大学の予科参りました」と声を上げたことを覚えてる。

そういう経験があるので、「先生は専修大学に適さないんじゃないかな」といった。結局、先生は女子系に行きました、上智に行ったのかな。よく会いましたけどね。

そんなことがあります、大河内先生は東大の経済学部出身、それから法学部は杉村章三郎先生、両方とも東大の学部長でね、そこからメンバーを集めまして、当時の東大の助手や有名な先生たちが大勢いました。みんな専修大学に来て、そして僕らのところで授業やってくれたんです。

それがちょうど一年後の昭和二十一年でしょうかね。それまで小泉先生が講義していたんですよ。学部の中は点数を取りたいから行っ

たんだよね。僕は反対してたの。「あんな先生の講義を受けたってしょうがねえんだから、大河内さんが来るから待て」っていったね。それで翌年の六月から大河内先生が中心になって講義が始まったわけですね。

そのときの若手の教員は当然助教で皆さんが知っているような有名な人たちですよ。後に偉くなった人たちがばかりだね。でも当時は一生懸命専修大学のために頑張ってくれた。我々も復員軍人で、助手の先生たちと同年代だから授業を聞きたいと思ひ講義に行きました。

そのうちに組織が固まり、段々と良い大学になってきたわけですね。だから大河内先生っていうのは本当に、もちろん後で悪口をいう人もいたけども、非常に立派な方でした。

大河内先生の思ひ出をもう少し話すと、僕は戦後卒業生の第一回の大会で呼ばれて、会議に出席したの。そのとき僕は大河内先生に卒業生が多いんだから寄付をもらって、もう少し校舎をきれいにする。それから体育会へ金を払ってもう少しグラウンドの整備をといったら怒られちゃってね。「君、何をいってんだ。専修大学は体育大学じゃねえぞ」っていわれて怒られちゃった。

それと、「僕は君たちの四〇年先を期待する。今は校舎があるのだから、ここで費用を集めて、それで校舎をきれいにするなんて必要ない」って大河内先生に怒られちゃって。「坊さんたちが檀家から費用を集めて本堂を改築なんていうのとは違うんだから」と。

繁住 立派な先生だったね、陸上競技部の部長になるっていう話もあったんだよ。

樋口 「うちは体育大学じゃねえぞ」。そういう気持ちだったのね。今、考えると大河内先生もすごいことやってるのよ。ああいう先生はもういないから。

それで専修大学がようやく軌道にのるわけですね。その頃私ともう葬式やなんかややお寺のほうの仕事が忙しかったけど、大河内先生がうちの大学には哲学を教える先生がいない、これだけ経済が進んでるけれども哲学の先生がいないと、僕に相談された。



正門前で清水幾太郎先生を囲んで（昭和22年）

それで当時、高山岩男教授という人が京都大学にいたの。でもそ

の人はやめて、大河内先生が清水幾太郎君っていうのがいるから、二十世紀研究所<sup>2</sup>に来てて暇だから、専修大学によすという訳で清水先生が入りました。私がお願いして総合企画研究会の会長になっていただいた。清水先生は神田校舎の木造の部屋で僕らといつもダンボールで寝てたんですよ。二十世紀研究所作ったばかりの頃だった。

あの頃は清水幾太郎といっても行く大学がなかったんですよ。当時は私立の旧制大学が少なかったですから。新制だったらいっぱいあったけどね。後で清水先生は学習院に引っ張られちゃいました。学習院のほうが給料が良いんですよ。残念だったけど。あの頃良い先生はみんな学習院に行った。一部の先生は学習院の下請けみたいな感じね。

向こうは金にあかしてたんだよ。専修大学は金がなくてね。本当に貧乏大学だったの。この辺は一番よく知ってる。あの当時、専修大学に金があったら今頃すごい大学になっていたかもしれないな。

その頃のうちの予科の学生は、大金持ちのあんまり利口じゃない奴が多かった。有名な警視總監の息子とか、三和銀行の頭取の息子とかね。慶応や早稲田を落っこちた奴がここなら入るっていうんで来たんですよ。だから茨城の多額納税者の息子とかも三人もいたんですよ。

だけど、予科を修了してから早稲田大学とか他の大学へ行っちゃったんですよ。親の引きでね。ここを出ると旧制高校と一緒に、東北大学の一年と一緒にすからね。みんな行っちゃった。もうそういう時代だったんですよ。

僕らが専修大学に来た頃は早稲田なんか学生いないんですよ。早稲田の文学部なんか生徒がいないんですよ、みんな兵隊へ行っちゃってね。だからうちから早稲田に行ったのがずいぶんいますよ。あのときは東大の法学部を除けばどの大学でも大体入れた。東大の文



学部、とくに言語学科は学生が二人しかいないからいつでも入れるっていうんでね。でも僕はその当時、専修に入ったんだから、ここも良い大学だといって残りました。

最後にもう一つ、専修大学の名前を変えようという運動があったんです。専修大学という名前では坊主大学と間違えるっていうんですね。特に応援団の連中は。そこで学生大会に出て来た学生に尋ねたんです。君、専修っていう名前はどういう意味か知ってるかと。「専門を履修する」こんな良い名前はないじゃないかと。東京経済大学とか、専修経済大学にしようというのを僕は反対したんです。絶対だめだと。伝統があるのに名前を変えちゃだめだと。だから専修で頑張ろうじゃないかってね。

それで専修大学の名前そのまま維持したんです。あのとき反対しなかったら経済大学になっちゃったんですよ。東京経済大学と一緒にになっちゃうからね、専修の名前は。

そんなことで、色々とありましたけど。まあ、その後は若手が大事にやってくれましたから私はその辺で引っ込んでいったんです。そんなことが戦争前後ですか。その後はまた色々和我々とはまた違う世界がありました。新制大学については私どもにはわかりません。以上この辺で。

大谷 大変貴重な話、ありがとうございました。

本当は質問もしたいんですが、それは後にいたしまして、次の世

代の先生で、繁住、斉藤、両先生ですけど、それでは繁住先生からお願いいたします。

繁住 私が専修大学の予科へ入ったのは昭和一九年。土浦中学、今は茨城県立土浦第一高等学校といってますけど、ここの出身です。やはりその頃から運動部に関係していました。どうも学問的には弱い方で。それで中学は五年までありましたが、途中の四年で専修大学に進学して来ました。

専修大学へ来て、今、樋口さんが、すごく悲観的に弱い学校みたいになってましたけど、私も県立の中学から来て、学生の多くが私立や夜間から入ってきたとかそういう話を聞いたときは、多少は愕然としました。しかしやはり先生のメンバーもよかったし、我々としてはそういう意味では幸せな大学だなと思ってます。

運動部出身なんですけれども、戦争で運動部がもうみんな絶えてしまっただけで、戦争中の記憶っていうのは中学四年の時に、テニス部だったんですけれども、県の大会へ出て、県では銅メダルでしたが、そのとき英語が全然使えなくなりまして、アウト・セーフじゃなくて線外・線内。あとはアドバンテージ、レシーバーだの何だのってあれはどんな言葉を使ったのかなと思って。今思うとまあ、優先とか何かを使っただろうと思います。そういう戦争中の運動部の思い出がございます。

戦後、昭和二年になりました、陸上競技部が箱根駅伝に出場す

るのに選手が不足していたらしく勧誘が来まして、戦争中は学生に  
対して上級、中級、初級というような体力章というのがありました。  
それで上級の人がいますかというようなことで陸上競技部の人が勧誘  
に回って歩いたんです。私も中学時代は、校内では陸上部の連中に  
は負けないような走りをしていたもんですから、うっかり手を挙げ  
てしましまして、それで陸上競技部に呼ばれて、昭和二三年に再開  
された箱根駅伝の二区を走らせてもらいました。

予算は大学の経済的な面からいくと非常に厳しかったんでしょ  
うけれども、一応合宿も小田原で行いましたし、箱根については用意  
万端整えてくれて、我々も参加することができました。

当時は戦後のことで、食べ物もないし、着るものもない。ないな  
いづくしで走ったわけですけども、シューズもレンタルして、足  
袋みたいなもんですけども、そういうものを使いました。ランニン  
グシャツもなければトレーニングシャツもなく、陸上部OBが着  
ていたものをもらって着たもんです。

私なんかは幸いにベルリンオリンピックに出場した矢沢正雄（昭  
和一四年経済学部卒）さんという先輩がおりまして、その先輩のを  
着せてもらって、練習にも励みが出ました。

物が無いということについては各大学共通なんですけれども、当  
時、箱根の旅館に合宿に入っても、米がないとご飯を出してもらえ  
ない。私は先ほど申し上げたとおり茨城の土浦出身ですから、田舎  
の叔父の家に頼んで、米を何俵か合宿所まで運んだもんです。運ぶっ

ていうのは簡単なように今は聞こえますけども、当時はお米を一升  
でも二升でも持って歩いたら大変な時代で、各駅ごとに検閲があっ  
て、それを逃れながら合宿所へ届けるわけです。

肉もなければ何もない、運動選手としてはすこぶる寂しい話なん  
ですけども、たまたま箱根で肉が出て、うまかったと思っていたら、  
後で表のお土産屋のおやじさんたちに、「学生さんが食べたのは、  
犬の肉だよ」なんていわれたこともあります。それでもうまかった  
わけです。そういう愈い出が残っています。

今ではOBが指導してくれたり何かしたりしてくれるんでしょう  
けど、我々の頃は何もなしでまあ、選手もそろわないという時代  
でしたから。軍隊服のまままで戦争から帰ってきた学生たちが増え、  
だんだん部員も増えてきました。

そういう時期ですから、テレビ中継もない、せいぜいラジオのス  
ポーツニュースに出してもらう程度で、母校愛だけで走っていたわ  
けです。当時、我々陸上競技部員の意識としては、六大学には負け  
るな。少なくとも早稲田の臙脂えんじのユニフォームを見たら必ず抜けと  
いうぐらいの目標をもってやってきました。

それが一つの闘争心に近い形になったわけです。その甲斐あって  
駅伝ではその当時は四位、五位辺りを常に押さえていました。私の  
戦後というのは、運動部でいえばそこいらの話になるわけです。

戦争の終わり頃、我々は勤労奉仕に従事していましたが、その勤  
労奉仕で八月一五日を迎えて、もうみんなと会えないとそのときは

思い込んで、手なんか握って、またいつ会えるかわからねえなんて別れたんですけども、何のことはない、その翌日すぐ会えるような状態でした。

勤労奉仕も厳しい労働で、我々は午前中ぐらいに早番で帰って、上野辺りで座ったり何かしてのんきなことをやってると憲兵に、「お前ら学生のくせに今頃何でこの辺にいるんだ」っていう、「いや、俺たちの仕事の範囲が終わったから早く帰ってきたんだ」っていうでも聞いてくれなくて。「それじゃあ、お前の勤労奉仕の方角はどこだ」っていわれて、上野から松阪屋の方角を指したら「あっちへ戻れ」なんていわれてね、それで駆け足なんていわれて解散。途中でもちろん横丁へ行って、遊ぶといったもんですけれども、そういうような思いがありましたね。

これは陸上部へ入る前の話です。戦争中の勤労奉仕では、とにかく我々も死ぬことだけを考える教育を受けて、ポストンバックの中にかばんでも入ってたら、それを種に脅されたもんです。私は土浦から通ってたもんですから、上野の駅を降りると、昭和通りのグリーンベルトがもう死人の山になったり、いわゆる東京大空襲があった三月一〇日でしたかね、深川辺りがやられた頃は。

それでも学生の身分についてはいわゆる勤労奉仕の報国隊です。胸のところは専修大学報国隊、誰々という名札をつけて、まあ、戦争中なので学生服じゃなくて、何色っていうんですかね。黄色っぽいような、いわゆる国民服ですよ。あの色でみんなそろって、

あんまり格好の良いもんじゃなかったけれども、とにかくそういうことをして勤労奉仕に精を出してやってましたね。

戦争が終わって、陸上競技の試合に出たのは二年です。その前の二年の夏頃に陸上部に勧誘されて入ったわけですから、二〇年と二一年を挟んで、私は田舎に帰って学生を集めて文化運動とか、そういうことをやりました。

もう日本は刀、鉄砲ではなくて、文化でいくんだということで、土浦の学生を集めて、町の中の講堂をその土地の学校の校長先生などを説得して使わせてもらいました。歌手の方たちなんかをお願いして、ソプラノやアルト歌手など、それぞれの特徴のある芸大の教授クラスの方々が土浦へ来て、歌ってもらうというような運動をやりました。

そういう激動の時代ですし、僕らは体育会系ですから、落ち着いて本に向かって勉強するというのにどうしてもなじめない方で。それでもやっぱりそれなりに希望をもって、戦後の目標もつけてやってきたつもりです。

新制大学の話をということでしたので少しお話しすると、我々は大学が狭いと感じていましたから、広い敷地があると良いなといったら、新制大学になるとやっぱり広さが要求されるということで、大学もあちらこちら広いところを、埼玉県の朝霞や、昔の士官学校の跡地辺りを探しているという話も聞きましたけど、最終的には今の生田になりました。

学生代表でちょっと見に行ってくれというんで、私たちもその当時、福永忠一先生（当時、総務室長）に案内してもらって生田に行きました。やれプールがあるだの何だの、とても華々しい話を聞かされて、威勢よく行ったら、そのプールは貯水池だったんですけどね。

それでも広いところではあるし、また丘の上にもあったし、大喜びで見せてもらって、帰りに福永先生と稲田登戸、今は向ヶ丘遊園というんですが、駅に近いそば屋へ入れてもらって、結局そばじゃなくて、さつま芋のふかしたのをご馳走になって帰ってきたこともありました。

私の印象ではそういうところですよ。あとはまたお話いただければお答え申し上げます。

大谷 ありがとうございます。次に繁住先生と同級の斉藤先生から、お話をいただきたいと思えます。

斉藤 斉藤です。私も繁住さんと同じ一九年に予科に入りました。予科時代は何のことはない、もう勤労奉仕ばかりで授業はほとんどない。いきなり日暮里のドラム缶工場に引き出されたり、それから常磐線や東武線の沿線の住宅が空爆などで延焼すると鉄道がストップするというんで、沿線の住宅疎開などの労働に駆り出されましてね、それで家屋の撤去作業をやらされたり、陸軍の芝浦倉庫で軍需

品の積み込み作業などをやらされました。<sup>4</sup>

空襲の最中でもあったし、かなり危ない勤労奉仕でした。他にも同じ仲間が勤労奉仕のために日本鋼管に行ってる者もいました。

授業で記憶に残っているのは、「外国書講読」でアダム・スミスの「神の見えざる手」ですか、インビジブルハンド、いわゆる経済はほっといても良いんだと、というようなことを英語で習ったことが印象に残っていましたね。

経済学の授業で印象に残っているのはそのぐらいで、ほとんど経済学については何も覚えていません。まあ、結局戦後のどさくさというところで学問へのやる気を失わせられたというか、本人次第なんですけど、しかし戦後になって、本格的に大学の授業が再開されたというので出てきたら休講、休講で全くうんざりさせられていた。そういうところをもって、小泉総長の不祥事なんかが出てきて、総長排斥運動というのが全学的に広がったんですが、考えてみると、我々のやってきたのは何のこともない、先輩の樋口さん辺りがすっかりお膳立てをして、こっちはそれに乗っかって反対、反対なんていって、実際のところは樋口さんによってもらったということです。

それで感激したのは、すっかり教授会のメンバーが一新されて、経済学部では舞出長五郎の「経済原論」、それから大河内一男の「経済政策」、これ辺りは本当に緊張して、これは東大と同じだというようなことでね、非常に感激して授業を受けたもんですよ。

やっぱり名教授が壇上に立つと、しーんとして、一瞬も迷さず話

を聞き漏らすまいとしてメモをとるといような、非常に緊張した一時期がありましたけれども、まあ、その後は学生運動の延長で自身の薄い学生生活になってしまったといようなことですね。

専修ってというのは非常に地味な大学という印象は、これは拭えないことですが、運動部の活躍なんかについて、私が学生自治会の代表やっていた頃は、箱根駅伝の応援のため、これは学生自治会と体育会のメンバーが合同で、あれは箱根のどの辺だったか、旅館にもって泊まりに行つて、トラックを一台動員して、それに乗って駅伝の応援をしたという記憶があります。

駅伝について思うことは、野球でいえば六大学と同じように駅伝では、専修大学は常にそのメンバーに入つてたわけですね。以上です。

大谷 ありがとうございます。あとからきつと質問されると思うんですけども、こちらの新井先生のゼミは常に箱根駅伝の選手が在籍しています。毎年、先生は学生と応援に行つておられますが、またそういう議論をしていたら良いと思います。

今、樋口先生、繁住先生、斉藤先生という順番で、それぞれ戦争中に大学の予科に入学され、戦後に旧制大学を卒業された三人からお話いただきました。

あとの三人の皆さんは、ちょうど一番最初の新制で入られた方だと思いますので、お話をいただきたいと思ひます。

それじゃあ、五十音順で秩父先生からよろしくお願ひいたします。

秩父 今、司会の大谷先生からお話ありましたけども、今ここにいる三人は新制で入つたのではなく、専修大学の大学予科に入学し、二年間就学し、途中で新制大学に強制移行しました。その頃は先ほど樋口先生もお話ありましたように学部と専門部と、大学予科とがあつて、新制に強制移行したのは予科の学生だけです。

それで、個人的なことを申し上げますと、父親が広州湾上陸作戦、それから満州事変、それから終戦直前のところでは国土防衛隊というところで三回も陸軍に召集を受けまして、まあ出征軍人の家に相当するような家で、進学させてもらえるような家庭状況じゃなかったんです。したがつて夜学だけでも行きたいということ、ずっと通してきております。

後になつて夜学でよかつたなつていうのは今、先輩たちのお話のように昼間の学生というのは軍需工場に行つて勤労働員をしたり、畑で芋作りをしたりとかね、軍需工場で爆撃を受けて亡くなつた先輩もおられるんですけど、とにかく勉強をろくにしてない、かわいそうな状態の中で、私ら夜間学生は灯火管制はありましたが、授業はフルに受けることができました。結果的には恵まれていたんだなあと思つております。

それで夜間の大学予科を受けようとしたときに、東京には中央大学と専修大学だけしかなかったんです。それで専修大学にやつと取つ

でもらったというのが実態です。終戦直後、小泉総長追放運動が終わった昭和二年の四月に入学してまいりました。それまでの学園騒動がうそのような状態で、今度は逆に、学生のエネルギーは一部では学生自治会、二部では学生会の活動に向けられ、非常に盛んでした。

当時は、先ほど来、お話もありましたように、軍隊から帰って来て復学しようという人が大勢おりました。軍隊出身の人は定員の十分の一しか入学できないという制限があったように聞いております。

私らの予科の同級生に警視庁の巡査部長の半田さんという方がいて、ノート貸してくれなんていわれたこともあるんですけども、とにかく結構年を食った人が多い。それと意外に社会経験をしている人が多くて、家が貧しいからじゃなくて、結局旧制中学卒業後に勉強をし直そうという人が中心なものですから意外に情熱がありました。

学生会の代表には、後に公認会計士に合格した人とか、大学の教員になったとか、そういう人たちが意外に多いんです。私らの同級生では菱木昭八朗（後に法学部教授）が二部の予科B組におりました。彼は軍服を着ていましたので、「軍隊に行ったのか」って聞いたら、「いや、着るものないから古着屋で買ってきたんだ」と、こういう状態でしたね。

戦前は小学校六年を五年で修了して、中学五年制のところを四年

で修了して、そして一高（第一高等学校）、東大に進学するというのが超エリートコースだったんですね。それは私にとっても夢でした。自分の家庭状況からすると比較しようもない格差ですけども、とにかく東大在学中に高等文官試験、あるいは外交官試験に合格して、二一歳のときには高等文官で大礼服を着れるような若者がいたんですよ。

しかしそれにはとても及ばないどころか、戦争中は爆弾がばんばん落ちてくる東京にずっといました。それが終戦後になって、食料もなく、栄養失調になって、親が疎開していた福島県に行きました。たった四ヶ月離れて学年末試験を受けなかったばかりに学校戻ってみたら留年だったんですよ。四ヶ月しか休んでないしかも成績がクラスで二番だったので、「必ず追いつきますから戻してください」っていったけど「だめだ」っていわれて、悔しながらも同じ学年を二度やりました。

そのときにもうこれ以上ここにいてやるもんかという感じで、飛び級で専修大学の予科に入った。ですから私は中学校の卒業免状は持っていないんです。そんなことがあります、勉強はもう良いやと思っているところに一年生の学級委員を引き受けてくれていわれましたけど、誰も手が挙がらないものですから、学生委員になりました。

それで予科の二年間、学生委員をやっている途中で先ほど来お話の大河内先生が経済学部長で入ってきて、後に学長になりました。

二年になったとき全学の学級委員会があって出席したら、予科二クラスの学級委員六人のうち四人が落第していたんですね。落第点二科目以上の者は進級させないと。いわゆる「大河内旋風」っていうのがありましてね。専修大学の評価を上げるために成績の悪い人間は落第させることになった。

前もっていってあげれば良いのに、後でいわれたものですから、結局四人が落第して、それでどこ行ったかっていうと早稲田大学に鈴木君が転学して行きました。ほかに内海兄弟が明治大学へ転校して行きました。日大へ行ったのがあります。そんなんで一学年に学級委員が二人しか残ってない。

もう一人の古谷哲雄君（昭和二七年商経学部卒）と私が残ったんですけど、古谷君は後に三菱化学を経て聖徳大学で電算担当の教授になりました。

そのうちに、新制大学になるということになりました。ところが専修大学に資金がなくて、新制大学の単位履修の説明書の原稿を書いたけど印刷するお金がないという。学生は資金があり、私がたまに学生会内組織に新制大学協議会を作って副委員長やっていますので、教務課の資料を学生が作ってあげる、説明もするということを買って出しました。

「大河内旋風」の後で多くの仲間が落第した後、学級委員会に出席したら、「お前、自分たちだけ助かったからって大きな顔して委員会に来ちゃだめだよ。何をやっているんだ」と、こいわれたか

ら、先輩に聞いてみると、「先生に試験の範囲がどうなるのか。この男たちはまじめに授業出ているから落第点は絶対やめてくださいっていう要望書を出したか」っていわれた。それで次の予科二年のときにはそれをしっかりやりました。

その時の先生のなかには後に常務理事になった森下澄男先生がいましたが、「先生、授業の試験範囲を教えてください」と、「何でおれがお前らにいわなければいけないのか」って、僕が「迷惑をかけないから決めてください」というと、「教科書の何ページから何ページまで」とかいわれてね。その情報をみんなに流して、とにかくみんなが落第点をとらないように努力したのが予科二年の学級委員の仕事でした。

それから、当時は教科書が足りないんですよ。じゃあ、学生が本を作りましょうと。結局、謄写版で刷って五円で売る。とにかく大学は資金がないから、単位履修のガイドブックを刷ってあげる。教科書は自分たちで作って学生に分けてあげる。そういうことをやっていた。奨学金も一〇〇万円の枠があったけれど、教務課の平田さんや杉山さんが結局審査できないから、学生会の委員に推薦してくれといわれて、奨学金の予備審査まで教務課に代わってやっています。

というようなことで新制大学二年次に編入してから三年間、学級委員を続けました。最初の二年間のバッヂは真鍮でできた陸軍の襟章みたいなごっついものでしたけど、あとの三年間は社会人にふさ



上段左より昭和22～23年、下段左より同24～26年の学級委員のバッヂ（秩父氏寄贈）

の先生方が悲鳴上げていましたね。当時は、学生が一番偉いんですよ。学生は授業を聞くお客さんでお金を出す人。教員や職員はその月謝の値上がりによって、収入が、つまり月給が上がるか上がらないか、ということでした。

ですから今村総長は出席しませんでしたけど、築田理事長が中心になって授業料改定の話し合いとかをやっておりました。

その当時、評議員で税理士の加藤圭三さん（昭和一八年専門部計理科卒）が持ってきた風呂敷包みのお金で教員と職員に給料を払ったというようなことを聞いておりますけども、とにかくすごく資金繰りに困っていました。

そのような理由で、今村総長や築田理事長の寄付で生田校舎を購入したけれども、神田校舎の改築なんかできないわけです。それ

じゃあ学生が協力しようよ。とにかく資金作りをしようよということ引き受けて、当時コロナというたばこが一箱一〇円、ピースが七円。今、三〇〇円ぐらいしますが、それを一日一箱ずつ買ったつもりで、そのお金を大学に寄付しよう、というような考えで七円×三〇日×二ヶ月ということで、年に二五〇〇円、四年で一〇〇〇円、これを寄付する運動を始めようとなりました。けれども授業料値上げですら反対がある最中に、神田校舎の建て替えをするのにお金を出そうっていうのはすごい反対があって、三回ぐらい学生大会を開きました。

ですが、だんだん文句をいう人間も減ってきて、それが承認されて、それで神田の旧校舎が取り壊され、新しい校舎、今の一代前のものですね。それを奥村組に発注する運びになったと、こういうことです。

私の大ざっぱな記憶ですけど学生が昼は三〇〇〇人位、夜は三二〇〇〇人位おりましてね、学生会はすごく金持ちだった。ですから一部の方は先ほどの繁住さんの話ではないですけども、駅伝だ、野球だといつてもかぼちゃ食って勝てるかなんていう時代で、結局二部の学生会から、援助金を提供しようということ、私の聞いた話じゃ五〇万円。今の価値では五〇〇万か一〇〇〇万円ですね。それを運動部に寄付したと。その位の意気込みが二部にはありました。

また学生会にはそうそうたる人物がおりました。今でも付き合っている眞保潤一郎さん（昭和二四年経済学部、二六年法学部卒）は



一橋大学で博士号取って、大東文化大の学部長をやっていましたけど、こういう人が先輩で、私が彼の次の会計委員をやった時代ですからね、皆さん本当に切磋琢磨して助け合っていました。

そのおかげで卒業して間もなく、校友会会長が、新しい形で山崎修一さん（大正五年経済科卒）という方になって、一三年間続くんですが、そのときに二部の卒業生が中心になって、戦前卒業の役員ばかりで構成されているのが不満だということで「専互会」というのを作っただけですよ。

それで校友会の役員に戦後の人間をもっと登用すべきであるという要望を出したところ、昭和二九年一月になって、そのうち三分の一か四分の一が選ばれたんですね。そのなかに私も入っております。

そのときに名簿を見ると、後の校友会の幹部では、千葉博（昭和一年専門部経済科卒）名譽会長と私だけが当時入っていました。

それで、とにかくその後、校友会長を務めた林一夫先生（昭和一五年専門部経済科卒）、副会長をやった山口省三郎先生（昭和一六年専門部経済科卒）などは入ってませんでした。二九年度の校友会の改革のときから、参画させていただいたということです。

あと『百年史』などに、戦後でもない頃に、二部はろつそくで授業したという記述がありますが、私は知りません。

実をいいますと私は自分の会社から石油ランプを持ってきて、それに灯油を詰めて、教壇の後ろの開いているところにしまっというて、

停電するとまずそれで明かりを点けていました。当時マッチは配給で、一日に軸五本なんです。だからランプに火を点けるのにも大変な時代なんですよね。私のように煙草を吸わない人間は、マッチを大事に持っていたんですけど、とにかくマッチがないと電気マッチなんていって、コードからニクロム線で熱を起こして、煙草を吸ってる人を大勢見かける時代ですからね。

それで、停電になると、総長がおられる隣の小遣い室にバッテリーを取りにいのが学級委員の仕事なんです。それで手探りで降りて行って、昼に充電したバッテリーを持ってきて授業を続ける。それはもう顔が見れる程度で黒板は見えませんがね。そういう雑用を学級委員がやっていました。ほとんど毎日のように停電があったのでね。

それが富士見町、今の靖国神社の右側のほうに、進駐軍の宿舎があったという噂なんですけど、そこだけは電灯が煌々と点いているんです。専修大学は道路がちよっと離れていただけに電気が点いてないので不満がありました。

そこで二部の学生で、東京都内の大学や専門学校の連中が、当時は大学というのは全国で私立大学が二校ぐらいしかないんですよ。その二一校目が戦中にできた興亜工業大学（戦後すぐに千葉工業大学と改称）。そのぐらいしかないんですよ。

そのときに夜間学生連盟というのができて、電気の特配をGHQの教育局に陳情しようという運動が始まりました、そこで、専修大

学の旧制学部から松浪敏雄さん（昭和二四年法学部卒）と、大学予科から私が代表となり、中央大学に何回か集まったことがあります。

そのとき議長をやっておられたのが中央大学の松澤修さん。日本鉄鋼経営者連盟（現在の日本鉄鋼連盟）の事務局にいたので会いに行ったことがあります。この方は後に公認会計士になってNHKの公認会計士の番組で紹介されるほどの人物です。東京都中小企業団体経営者協会の税務指導をしています。

それから、日大の代表が柎木一策さん。後に参議院議員の全国区に立候補したので、ポスターを貼ってあげたりしてみんなで手伝ったんですけど、四九〇〇票ぐらいしか取れなくて落選しました。それが後になつたら茅ヶ崎の市長になっていましたよ。私の会社の上司が大岡越前祭で越前守の姿をしている写真を持ってきて知ったんです。そのほか早稲田は長谷部平吉さんが代表で、後に彼は長谷部建設を設立して日本橋に自前のビルを建てました。

こういう連中で電気の特配要求をやったんですよ。当時は早稲田大学には理工学部がなくて、早稲田高等工学校といいました。高等工学校でもないんですよ、そのまた一つ格下の乙種の学校でした。また日大も高等工学校。今では早稲田の理工がすごいとかいいますが、二階級特進して新制大学になってのさばっているじゃないかっつっていったもんですよ。

女子専門学校も、都立女子専門学校（現・首都大学東京）だとか大妻女子専門学校（現・大妻女子大学）とかも出席していました。

神田五大学が中心になって夜間学生連盟で電気の特配の運動をしたんです。

大谷 ありがとうございます。いろいろ我々もわからないことがありますけどお許しください。それで、つづきまして長谷川先生お願いいたします。

長谷川 私は工業学校を卒業しましたが、戦後、社会の変化から文科系の学校に進みたいと思って、専修大学を見学しに行きました。

私の家は二〇年の空襲で焼けてしまいましたが、神田の情緒あふれる町並は、空襲から焼け残り、数々の本屋さんや外食券食堂、映画館、お風呂屋さん、昔懐かしい町が残っていたいへん気に入ったことを覚えています。

当時の専修大学は町のなかであって、南側道路の右側の門から入ると、二階建の木造校舎、左側に一階建の木造図書館、正面には三階建ての鉄筋コンクリートの校舎があって、一階の中央部には掲示板と事務室、それから、右奥の地下一階には食堂がありました。

それを見て専修大学を受験しようと思ひ、昭和二二年に予科の二部に入學しました。

家から大学までは約一時間かけて通いました。私鉄と国鉄を二回乗り換えて水道橋駅を下車して歩いて八分。それが今では地下鉄の三田線を利用しますと神保町まで約三〇分で大学へ来られるように

なりました。

また当時は、専修大学前から、渋谷方面へ行く市電も走っていましたが、これはもうなくなってしまいました。

大学の周りのことを少し話しますと、大学に隣接する東側の道路をはさんで、天理教の布教所がありました。布教時間になりますと太鼓の音が響いて授業中は煩いと思っただけです。

神田校舎の敷地は、専修大学が移転してくる以前は大きな池だったみたいで、大雨が降ると神田川の水が溢れ、この池に流れ込んだと聞いたことがあります。今では神田川全体の岸壁補修工事が完成して水の出る心配もなくなったようです。

神田校舎の改築工事の時、地下三階まで深く掘り下げたら、地下から海底で見つかる貝殻が沢山出てきたので、周りは海を埋め立てていたことがわかった次第です。

授業やクラスの思い出としては、当時は秩父さんがお話したように、電気事情が悪く授業時間中に停電することがたびたびありました。クラス委員が点した蝋燭の火やランプの明かりで、辛うじて授業を続けていました。

最近の教壇は随分低くなりましたが、その頃の教室の教壇は七〇センチ位あって、一列目の席に座って授業を聞いてますと、先生の靴が目に入りとても気になりました。

当時、授業を受けもつ先生というのは大河内一男先生の関係もあつたんでしょうけども、内田義彦先生とかいろんな有名な経済学部の

先生がいましたが、そういう先生方はほとんど全部兼任だったと思います。それで二四年の新制大学になってからやっと専修大学の専任の先生が決まって、授業するというようになってきて充実したわけです。

ですから先生はもう超一流のすばらしい先生が来ていました。大河内先生にも習った記憶があります。とにかくそういうふうな立派な先生がいた時代がずっとつづいてきたんで、そういう面ではすばらしかったなと思います。僕たちは東大並みの高い教育を受けていると自慢をしていた友達も大勢いました。

私は、予科Bクラスでしたが、秩父さんは、学級委員として活躍し、大学にも協力していましたから、二七年卒業のとき、神田校舎の増改築に貢献された感謝状を今村総長、築田理事長から受けています。

新制大学の移行の頃の話をしさせていただくと、昭和二二年にアメリカの教育使節団の勧告をうけて、文部省は新しい教育制度の一環として旧制大学を新制大学に移行させることを発表しました。専修大学の場合は、神田校舎の用地面積二〇〇〇坪だけでは狭すぎるということで、大学の設置が認められなくて、慌てて建設委員会を作り、用地を探しました。いくつかの候補地のなかから生田校舎の約四万坪もある広い用地が決定して、専修大学は日本電気と何度も交渉して、月賦で購入できるようになった。非常に苦労したんです。こうやって用地のほか、教員の資格問題、専任教員の採用など

いくつかの問題も解決してようやく認可を得たんです。

日本電気研究所は、戦時中、風船爆弾の研究をしていた施設で、場所も約八〇メートルの台地ということもあって空襲でやってくるB29を撃墜するために高射砲陣地跡の基礎と、防空壕があった。そんな場所でした。

生田校舎までは、小田急電鉄の稲田登戸駅（現・向ヶ丘遊園駅）、南側を下車して、約二〇分ほど坂道を歩くんです。今は舗装されました、北口からバスも出て便利になりましたが、当時は、泥道で農家の馬車も通り、雨が降りますと非常に歩きにくい道でした。それはなんでかという、二〇万年前に富士山の噴火で飛んできました火山灰のせいです。赤土（関東ローム層）とも呼んでいました。

校舎の整備はなんとか昭和二四年四月の授業開始に間に合って、



開設時の生田校舎正門付近

日本電気研究所の平屋建ての建物を教室に使用して昼間部の授業が行われるようになりました。それで昼間部の学生は、神田校舎から生田校舎へ移ったんです。復員された学生も帰り、学生の数も年々増加して、施設の充実も行ったおかげで、新制大学へと生まれ変わったことは専修大学にとって大きなチャンスとなったと思います。

ます。

卒業後は職員に採用してもらったんですが、みんな安い給料で我慢して、苦しいなかで学校自体、とにかく一生懸命みんながやったわけです。そのうちに学校も、生徒がどんどん増えてきて、よくなってきたんで、それからだんだん給料もちゃんともらえるようになりました。良くなっていった時期としては、鈴木義男先生が理事長の頃だったというふうに記憶しております。

そういう苦しい時代、昭和二十七年から一日も休まずに学校へ来ていましたので、いろんなことをある程度は知っております。『百年史』を作ったときにはちょうど総務部長をやっております。『百年史』の立場からこの『百年史』の編集関係についての責任者のような形で名前だけでも、当時担当をしておりました。

そういうことで平成三年頃まで大学の役員で、その後専修大学玉名高等学校の理事長になって、平成一三年一月の役員改選で退任しました。

大谷 ありがとうございます。それでは最後になりましたが古家先生よろしくお願ひいたします。

古家 私の出身は和歌山県の田辺というところで、戦時中は中学生でしたが、陸軍の飛行学校を志願して約二年、学校に通いました。そして旧制中学の五年生を、昭和二二年に卒業して、当時大学の予

科は中学四年生から入学する資格があったんですけども、どうも進学するには勉強不足だということで、同じ同級生に四年生から予科に入った、予科の学年では一年先輩ですけども、彼から専修大学に來いよという誘いを受けました。大河内先生など有名な先生がいるからっていうので、それで昭和二年に予科に入学しました。

当時は終戦直後ですから食料難で、食堂でも食券が必要とするような学生生活を過ごしたんですけど、たまたま叔母が新宿におりましたので、その家に下宿して、そこから神田校舎へ通いました。

ちょうど昭和二年、予科へ入学した当初、予科の学生大会がありましたね。私も何もわかりませんが参加したら、予科の無能教授一〇名の追放大会を一階の木造講堂でやっていました

それが収まるとクラブ活動に従事しました。樋口先生とか坂本常務が作られた総合文化研究会で活動しました。夏休みに大河内先生をはじめ有名な方々が一ヶ月間、一般公開の講座を行っており、私も負けずに銀座にポスターを貼って回りました。一年生で何もわかりませんから、お前貼ってこいっていわれて行ってきたけれども、そんなこともありました。

それから、その当時今村力三郎先生が総長で、その秋、学部の学生が受験を受けた際に強盗事件がありましてね、大きく新聞に載りました。そこで今村先生が学生を集めて、法律的ないろいろな説明をしてくれて、絶対協力するぞといった話が一番印象に残っています。

予科のクラスは私たちの時はA組とB組がありました。一六〇ずつ、三〇〇人ほどいましたかね。当時、今村総長は神田校舎の教員室の後ろにベッドを置いて、そこへ衝立をして、そこから学校に出て来る。大学の近くの地下には映画館があって、そのそばには銭湯があったもんですから、今村総長はその銭湯へ行っていました。私なんか風呂がないもんですから、学校の帰りに銭湯に行ったら先生がいました。「先生、背中流しましょう」とかいった記憶があります。

予科を二年で終えて、昭和二四年になり、新制大学の移行とともに生田校舎に通うようになりました。新制大学になって、生田では第一回目の昭和二七年に卒業しました。あそこは今みたいな通学路は何もありません。あの山道、細い道をずっと三年間通いました。そうして卒業して二四歳になって、長谷川さんと一緒にすけれども、大学の事務職員になりました。

当時初任給は確か事務職員で五〇〇〇円位ですかね。さきほどお話のあった菱木昭八朗先生が法学部の助手で同期ですから、やっぱり助手のほうが給料が良いのかな、なんて話をしましてね。その当時は月五、六〇〇〇円でボーナスも何も出ないですね。それから昭和二七年、鈴木理事長・学長になってから職員組合を



昭和32年頃の生田校舎通学路

作れっていうことで、当時の平田業務課長が委員長になって、組合を作りました。それからいくらか給料も少し上がってきました。

そんな感じで当時はボーナスも一ヶ月くらいでしたかね。昭和四〇年頃だと大卒で二万円ぐらいですからね。そんなことがありました。

それから昭和二十七年、私は夜間部勤務で長谷川さんも一緒でした。昼間は時間が空いているものですから、午前中は大学院の授業を受けましてね、小林良正先生の日本経済史でした。二級下に後に第一三代理学長になった望月清司さんもしましたね。私は大学院のときには小林先生が学長だったと思っていましたが、資料を見るともう学長じゃなかったんですね。二十七年には学長職を退かれましたからね。大学院の経済学の主任教授っていうんですかね。それからその後、木村国治先生が学長でしたかね。木村先生にも教わりました。小林先生はあんまりお酒を飲まないですけども、木村学長はお酒が好きでね、よく地元のすずらん通りで授業終わってからちょっと飲みに行こうっていわれて、行った印象があります。

それから、予科を二年で終えてから新制大学に切り替わる時に、上級生は予科三年が修了するとはかの大学に行っちゃうんですね。さっきいった私に専修大学に来いといった人も慶応義塾に行っちゃいました。慶応義塾大学政治学科や早稲田の法学部に行った人もいます。慶応に行ったら奴は慶応から今度は南カリフォルニア大学とコロンビア大学に行って、マイアミ大学の教授になったりね、まあい

ろいろと、そんなケースはいっぱいあったね。

そういうことがありました。さっき話が出ましたけど、私の時はクラスは少ないですけど割にみんな努力しています。囲碁のアマチュア本因坊の菊池康郎さん（昭和二十七年商経学部卒）、彼は同級なんですよ。学生チャンピオンで、今現在はアマチュアの八段ですけども、元気でやっています。

それから野球部にいた高橋純次さん（昭和二十七年商経学部卒）はいすゞ自動車の副社長・副会長になりました。それから月村澄男さん（昭和二十七年法学部卒）は東京医科大学から編入してきて、東大で法医学の古畑種基教授のところで医学博士号を取って、和洋女子大学の教授を務めていましたね。

それから小川幸一さん（昭和二十七年法学部卒）は都立商科短期大学の学長をやりました。それから専修大学法学部の菱木昭八朗教授がいます。そういう、数少ないですけども、みんな努力しておりました。

私について話をしますと、二年前に元商学部教授の山下文明先生主催の日本国際開発研究学会に入りました。専修学校（現・専修大学）の卒業生で明治二八年頃に入学した韓国人留学生について学会で研究発表をしました。年史のほうに資料がありますけれども。その兪承兼さん、申佑善さん、池逸燦さんの三人が専修学校を卒業してから韓国へ帰って、高麗大学で講師を務めています。そのうち兪承兼さんは創立者のメンバーの一人に入っています。私は二回ばか

り高麗大学へ行って、博物館でその記録をとりました。

特に兪承兼さんは「韓国のアダム・スミス」っていわれるほど有名な人です。私は『百年史』を差し上げましたが、高麗大学の学芸員の課長さんから資料があったら欲しいということで、二回ばかり行って参りました、その後も個人的な交流をしております。

まあ、そういう面では韓国の高麗大学とは交流がありますけれども、特にその、一〇〇年前の専修大学の動向ということで、大谷先生には資料の一部を差し上げましたけど、私は大学院の経済学研究所で日本経済史を学びましたから、そういうことに興味をもっていまして、何かお役に立てればと思いました。そんなことでございます。

大谷 諸先生方には大変貴重な話をいただきましてありがとうございます。(座談会はこの後、質疑応答などを行ったが、紙幅の関係上省略させていただきます)

この座談会は最初にお話しましたように『専修大学史紀要 第二号』に何らかの形で反映させたいということです、その節は皆さん目を通していただいて、またご意見をいただきたいと思っております。それから、今回はこういう形で六人の校友の方々に集まっていたいただきましたけれど、これで終わりにしないで皆さま方も機会があれば大学史のほうから聞き取りに行ったり、あるいは資料を少しお持ちなら、提供していただきたいとお願いに行きます。

今後もこのような機会を作って、何か新しいことがやっていければ良いんじゃないかと思っておりますので、ぜひともご協力よろしくお願いします。それでは今日はこれで終わりにしたいと思います。

—— どうもありがとうございました。

#### 【註】

1 自転車部隊とはアジア太平洋戦争初期の南方作戦などでも使用された自転車を移動手段として装備した陸上戦闘部隊のこと。日本陸軍のものは銀輪部隊と称されていた。

2 昭和二十二年二月、細入藤太郎(立教大学教授)、大河内一男(東京大学教授)、清水幾太郎が設立した財団法人。二十世紀研究所の設立目的は「社会科学および哲学の研究と普及」で、「二十世紀教室」という講習会の開催、「二十世紀教室」の講義録の出版を行っていた。

3 戦後の陸上について、質疑応答の際に次のような発言があった。  
繁住 陸上部は、相馬勝夫(第一〇代学長、第七代総長)先生が長いこと部長をやっていました。戦後の昭和三〇年頃、合宿所を作ったんですよ。合宿所といっても人のガレージを借りたものですけど、ただその頃でも六〇何円だったんですよ。それでOBから僕が資金を集めても二〇何円しか集まらない。あと

四〇円も足りない。でも相馬先生が「繁住、金のことは心配するなよ」といつてくれてね。後で川島正次郎（第六代総長）さんにその話を聞かせたんだよ。本当に相馬先生っていうのは立派だった。

4 戦争中の話については次のような質疑応答が行われた。

新井 戦争中のお話をちょっと聞きたいんですけど、大学が段々こう戦争色が強まってくると思いますか、いつぐらいからこう、大学の雰囲気って変わってきたんですかね。

樋口 昭和一七年頃からじゃないですか。会計学の黒沢先生がラップ服着て、学生を連れて農場へ行っていたからね。

秩父 昭和一八年ごろには陸軍の将校が配属されていましたが、大学ですと大佐、連隊長クラスが配属されましたよ。私たちの学校では野間少佐が軍事教官のトップでした。

繁住 僕らのところは中尉だよ。

新井 大学では配属された将校は何をしているんですか？

秩父 軍事教練という授業時間をもっていきますからね。

私らみたいな若い者でも幹部候補生の資格を取るためにもう一六〜一七才から城壁登りから匍匐はくふくなどの訓練を教練として全部やらされた。歩兵操典で歩兵の使い方の訓練の学科と実技があるんですが、その配属将校がそれを受けもつんです。

その偉い将校の下に実務教官がいて、それがもう、叩き上げのすごい少尉とかがいるんです。私はそれで膝が悪くなって、

壁を登ることができなくなってようやく逃れられたんです。でも「壁を倒すほどぶつかってみろ」っていわれましたけどね。学科も実技も良かったけど、膝が壊れちゃった。

繁住 手榴弾投げたり。

秩父 そうですね、手榴弾を何メートル投げるかの訓練ですね。

三〇メートル先に行かないと、自分が怪我しちゃう。だけど我々がやると一五メートルとか二〇メートルしか飛ばないから、怒られてしまう。そういうのを学校でやるわけですよ。

戦争は嫌いだけど、軍隊に入ったら将校になりたい気持ちもあり、頑張ったんですね。

樋口 そうなんです（笑）。

新井 学生会が報国隊に名前が変わりましたよね。そのときはスムーズにこう、やむを得ずっていう感じですか。

樋口 命令ですから。

秩父 結局もう戦争で若い元気の良い人が兵隊に行っちゃうから、その穴埋めにね。私は実をいうと鉄鋼会社にいたんですけど、その会社はすごいですよ。女子挺身隊っていう女の人の組織。それから床屋さん、洋服屋さん、そば屋さんが国民徴用法で入ってくる。それから力士隊といって、両国の相撲取りがドラム缶を両手で持って船に積むとかね、徴用によって力士隊、女子挺身隊、それから学徒動員の学生とか、そういうグループが作られて、軍需工場で働くようになった。実際にはそんな



に戦力になんないですよ。床屋さんは会社のなかで床屋さんやっ  
てるし、洋服屋さんは独身者の洋服のつくろいを直したりとか、  
そんなことをやっけていても、それでも軍需工場ですからね。

新井 戦争中で、この先生の講義って記憶ある講義ありますか。

樋口 戦争中、僕はね、日本文学が好きで、予科一年生のとき  
が日本永代蔵、二年が源氏物語、三年が万葉集、これらを原文  
で読まされて徹底的に鍛えられましたよ。

日大の文学部長の先生によるとも良い授業でね。英語は使  
いづらかった。先生が敵の空襲受けながらこんな英語を習うの  
もおかしいなっていったんだよ。

繁住 おれが中学のときは先生がいましたよ。英語を読む  
なんて国賊じゃねえかなんて。

樋口 でも専修大学は違うんですよ。英語をすごくやるんです、  
旧制高校と一緒にしたから。

秩父 戦争中に電柱に英語を排斥せよとか赤尾敏大日本愛国党  
首の赤ビラが貼ってあっても、先生にあれどうしますかって聞  
いたら、いや、勝って向こういったときに使えるように勉強し  
なきゃだめだっていわれました。

(付記)

この座談会に出席いただいた古家保二様が、平成二年七月五日  
急逝されました。古家様と長谷川様には座談会のメンバー選定など  
当初から関わっていただき、お二人のご助力なくして、この座談会  
の開催はなしえなかったといえるでしょう。

古家様はこれまでも大学史資料課に、ご自身の資料の提供をして  
いただくなど、多大なるご協力をいただきました。本学として  
も古家様がお亡くなりになられたことは非常に残念に思うと同時に、  
心からご冥福をお祈りいたします。

なお、今回の座談会にも出席いただいた古家様の同期でいらっしや  
る長谷川様と秩父様に古家様への追悼の文章をいただき掲載させて  
いただきました。

(大学史資料課)